

初心者のための詩作の指導法について

及川俊哉

●現在のジャンルとしての「詩」の課題について

現在日本では詩を読み・書く人たちの人口が少なくなっています。ジャンル人口の減少はそのジャンルの衰退に密接に関わってきます。これを何とか食い止めようとするならば、少しづつでも詩に関心を持ってくれる人たちを増やしていくほかないと思います。さらには、あわよくば「詩を書いてみたい・読んでみたい」という気持ちも持ってもらいたい。そのためには初心者に対して入りやすい「入口」を設定しなければならないと思います。

さて、そのためにはどうすればいいのか？私は、高校の教員ですが、小・中学校の国語科の教育実践にも関心を持っており、その詩作の指導実践が大変参考になると感じています。今回は次の内容を記載します。

①私が参加しているサークルの紹介

②小・中学校での詩作指導の歴史

③実際の私の実践例の紹介

●地元の詩作サークルに参加して

ここ二年ほど地元である福島県福島市の詩のサークルに参加させていただいて、会員の皆さんの詩作のお手伝いをしています。二〇一三年に設立した「ポエム『福島 空の会』（以下「空の会」と表記）」というサークルです。サークル結成のきっかけは東日本大震災以降、福島市が開催した和合亮一さんを講師とした詩作講座だったとのこと。被災者としての思いを詩に託し、山口県の中原中也記念館での朗読会で朗読しよう、という趣旨の講座だったそうです。その講座の参加メンバーである佐々木政夫さんが中心となり、福島市主催の講座が終了した後、月に一回程度集まって詩作を続けようということになり、サークルを立ち上げました。当初は福島大学名誉教授の澤正宏先生が顧問をしていましたが、ご多忙のため、私がお手伝いをさせていただくことになりました。時間の都合で毎回の参加は難しいので、毎月、送っていただいた作品を読ませていただき、コメントを加える作業をさせていただいています。また、昨年からは年に二回程度詩作についての講座を持たせていただきました。メンバーは十数名程度。ご高齢の方も多く、これまでに詩作の経験のない初心者の方もいらっしゃいます。やはり東日本大震災の経験は地元の方々の中には大きな影響を与えており、その経験を言葉にしたいという気持ちや、震災前の地元の田園風景や伝統行事について作品にしたいという気持ち、または、現在の落ち着いた日常生活の様子を言葉にしたいという気持ちなどを動機として詩作に励んでいらっしゃいます。みなさんとても意欲にあふれ、熱意ある作品に毎月触れさせてもらいながらこちらもあらためて詩作について勉強させてもらっています。

この会に参加させていただくうえで私のなかでの課題意識は次の三点になります。

①会員の皆さんに楽しく参加し、作品を書いてもらうにはどうすればいいか。

②充実感・達成感・わかった感などを得てもらうにはどうすればいいか。

③これからも詩作を続けていきたいという意欲を持続してもらうにはどうすればいいか。せつかく表現意欲を持ってくれた人たちの気持ちを折るようなことをしてはいけないと考えています。

#### ●小・中学校での詩作指導の歴史

残念ながら、現在の学校教育現場では、多くの場合「詩の書き方」は教えられていません。また教えていたとしても小中学校の一部だと思えます。高校ではおそらくほとんど詩作の実践はないのではないでしょうか。なぜかという点、現在の学校教育は上位の学校の入学試験にその枠組みを規定されているという側面があるからです。一部にはもちろん素晴らしい教育を行っている先生方もいらっしゃいますが、そうした稀有な例を除き、入試のための学習という、あまり本質的でない教育が、日本全体をがちりと凝り固めてしまっているというのが現状です（その意味では寮美千子さんの『世界はもつと美しくなる奈良少年刑務所詩集』は詩の創作実践として学校現場以上に本質的な教育が行われており、驚嘆させられました）。しかし、こうした表層的な教育状況に囚われる以前には、詩の創作指導の実践を熱心に行っていた教員もかなりいたようです。

児玉忠の『詩の教材研究——『創作のレトリック』を活かす——』では、日本の児童詩教育の流れを次のようにまとめています。

一九二〇年代 童謡・児童自由詩

一九四〇年代 児童生活詩

一九六〇年代 たいなあ詩（主体的児童詩）

一九八〇年代 ことば遊び詩

以下に児玉の論の概要をまとめていきます。

一九二〇年代の「童謡・児童自由詩」は、北原白秋が雑誌「赤い鳥」で児童による投稿作品を募ったことで始まりました。この投稿欄に掲載される作品を教師たちが授業で児童・生徒に創作させたわけです。

一九四〇年代の「児童生活詩」について。昭和初期の経済恐慌や社会主義思想の流行などを背景に、教師の関心は児童・生徒の生活の背後にある社会的事象に向かっていきました。そんな中で追及されたのが「児童生活詩」です。無著成恭らの「生活綴方運動」などとも関連しながら、児童が保護者の農作業の手伝いなどの自分たちの生活事象を題材にして対象や自らの行動をリアルに描き、思いを述べるという点が特徴となっています。現在でも児童詩といえましょうした特徴をもつものとして認識されている場合が多いです。

一九六〇年代「たいなあ詩・主体的児童詩」について。一九六〇年代に入ると児童生活詩は全国的に文集などで大量に作成されるようになります。しかし、一方で似たような作品ばかりが提示されるという類型化が問題視されるようになります。そんななか大阪の松本利昭が「シユールリズム」を応用した作品を児童に創作させる方法論を提示します。「自動記述法」をもとに「『……たいなあ』という気持ち」を自由に挙げさせていくこの技法は「たいなあ詩」（「主体的児童詩」とも）と呼ばれました。しかし、一九六〇年代

終わりに急速にその力を失い、教育運動体としては分裂・解体してしまいました。

一九八〇年代「ことば遊び詩」について。一九七〇年代になると、これまでの「児童生活詩」と「主体的児童詩」との対立を止揚しようとする教育実践が現れてきました。この時期の教育実践の代表者としては『かぎりなく子ども心に近づきたくて』（一九九〇年）の著者である山際鈴子らがいます。続く一九八〇年代は社会の変化とともに人々の価値観が大きく揺らいだ時期でした。この時期に国語教育および児童詩教育に大きな影響を与えたのが谷川俊太郎の『ことばあそびうた』（一九七三年）でした。この頃の実践者としては『子ども・詩の国探検』（一九九六年）を書いた白谷明美がいます。

以上、詩作の全国的かつ活発な教育実践運動はおよそ昭和とともに終わったと言えます。二〇二〇年現在、残念ながら全国的な運動体と呼べるほどの児童詩教育の実践集団やその潮流はありません。もちろん寡聞にして私が存じ上げないだけかもしれませんが、現在活動されている学校教育の団体がありましたらぜひお知らせいただければと思います。教育現場で熱心に詩作を教えることがなくなってしまったことも、詩のジャンル人口の減少の一因かもしれません。最近の希少な実践例としては広島大学附属東雲小・中学校での実践をまとめた『詩とイメージーションの教育 理論と実践』（二〇一九年）があります。本書では小学三・四年生を対象に「詩の方法」（筆者注・表現技法をまとめたもの）を用いて詩を書く授業や、中学二年生に「マインドマップ」を用いて詩を書く授業が紹介されています。

（続きは発売中の「詩と思想」二〇二〇年五月号（土曜美術社出版販売）をご覧ください。）